

令和 6 年 6 月 29 日

令和 6 年度 北公民館主催シニア対象講座 北☆北シニアカレッジ

## 吉備国の古代史・上道氏と幡多（波多）氏の謎

吉備国の語り部の会 丸谷憲二

### 1 はじめに

幡多二千年の歩み編集委員会の『幡多二千年の歩み』出版は平成8年(1996)です。

吉備国の古代史解明に必要なのは、上道氏と幡多（波多）氏との関係の明確化です。下道氏、和気氏の研究が進んでいますが、「上道中子仲彦が上道臣の祖であること」「備前国造の上道臣斐太都が仲麻呂政権下で上道正道と名前を変えていること。」「宝亀 11 年 (780) の『西大寺資財流記帳』（奈良西大寺文書）の上道広成の南都西大寺への大豆田庄の寄進」は、備前西大寺の地名の由来ですが知られていません。『国学院大学・氏族データベース』から古代の上道臣を紹介し考察します。謎の意味は「吉備国の全ての部族の先祖渡来人」説です。吉備津彦命は東突厥国、上道氏はインド（巨石文化）、波多氏は弓月国です。黄蕨津彦命の東突厥国は波多氏の弓月国の近くです。弓月国は東突厥国に含まれるかもです。

※ 『幡多二千年の歩み』 幡多二千年の歩み編集委員会 平成 8 年

※ 『キルギス共和国と日本』 丸谷憲二 平成 24 年 (2012)

※ 『吉備津神社 七十五膳据神事の七十五の起源についての考察』 丸谷憲二 平成 27 年 5 月 23 日

※ 『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起と吉備国語源考 黄蕨・羈縻政策説と日本人バイカル湖畔起源説』 丸谷憲二 令和 5 年 3 月 18 日

高知県立高知城歴史博物館にて、3月9日に「秦・長曾我部の会、全国連合会」の発足式が開催されました。高知県と岡山県の秦氏研究者による組織です。岡山県からは岡山歴史研究会、岡山歴史楽習塾、秦歴史遺産保存協議会から21名が参加しました。

### 2 古代の上道臣<sup>かみつみちのおみ</sup>・・・『古事記・日本書紀』

吉備上道臣<sup>かみつみちのおみ</sup> 登場箇所 孝霊記

備前国上道郡を本拠地とした氏族。『古事記』には大吉備津日子命の後裔<sup>うし</sup>氏族とあるだけで、関係する伝承などは載せられていない。

『日本書紀』では、吉備津彦命（大吉備津日子命）の後裔<sup>うし</sup>氏族としての記述がなく、応神天皇の時代に吉備国上道県に中子仲彦が上道臣の祖とされる。

また吉備上道臣<sup>かみつみちのおみ</sup>に関する記事として、雄略天皇の妻である吉備上道臣出身の稚媛<sup>わかひめ</sup>、およびその皇子である星川をめぐる伝承が載せられる。はじめ稚媛は吉備上道臣田狭の妻となり、兄君・弟君という兄弟を儲けたが、雄略天皇は田狭が稚媛の美貌を自慢するのを聞き、田狭を任那国司として朝鮮半島に派遣したのち、稚媛を自らの妻としてしまった。それを聞いた田狭は新羅に寝返り、新羅討伐のために派遣されてきた弟君にも寝返るよう勧めた。しかし弟君はそのことを知った妻の樟媛に秘密裏に殺され、樟媛は弟君のもうひとつの任務であった「今来才伎<sup>いまきのてひと</sup>」を連れて帰国したという。なお『日本書紀』は田狭のその後を記述しない。のちに雄略天皇が崩御すると、星川皇子は稚媛に諭されて皇位をねらい、大蔵を制圧するが大伴室屋らによって鎮圧された。

吉備上道臣は血縁関係にある星川皇子を助けようと船団を率いて進軍したが、星川が討たれたことを知って引き返し、その罪によって支配していた山部を奪われたとされる。

ただし、この稚媛・星川皇子をめぐる伝承には多くの異説が存在し、田狭の妻を葛城系出身の毛媛とするものや、弟君が殺されず無事「今来才伎」を連れて帰国したとするものなど、なかには伝承の根底を揺るがすようなものも含まれている。そこに何らかの作為があることは間違いなく、その史実性を一切否定する見解も存在する。なお伝承が形成される過程の原資料としては、星川皇子の反乱が大伴室屋によって制圧されていることから、大伴氏の「家記」などが指摘されている。

星川皇子の反乱を最後に、『日本書紀』から吉備上道臣に関する記事は途絶える。ただし欽明天皇の時代には多くの「吉備臣」が対朝鮮半島外交で活躍しており、そのなかに「吉備弟君臣」という人物がみえる。これは雄略天皇によって新羅に派遣された弟君と同一人物であり、本来は欽明天皇の時代に任那日本府の官人であった弟君が、星川皇子の伝承が形成される過程で結びつけられたことが指摘されている。

すなわち吉備上道臣の人物が欽明天皇の時代には「吉備臣」として登場しているのであり、そのほか対朝鮮半島外交で活躍した「吉備臣」にも吉備上道臣が含まれている可能性は高いといえる。

以上のように、6世紀中葉までは勢力を有していたと考えられる吉備上道臣であるが、天武13年(684)に朝臣姓を賜った下道臣・笠臣に対して、上道臣は臣姓のままであったことから、そのころまでには氏族として衰退したのだろう。

しかし天平宝字元年(757)、上道臣斐太都が橘奈良麻呂らの謀反を密告すると、従八位上の下級官人にすぎなかった斐太都は、その功績によって一気に従四位下まで昇り、朝臣姓と功田二十町を賜り、さらに備前国造に任じられた。のち斐太都は正道と名を改め、仲麻呂の没落後もその地位を保っている。

延暦年間に活動した広成・千若も朝臣姓を称しており、おそらく正道の一族だろう。このように8世紀後半には再び上道臣(朝臣)が活躍しており、それぞれ広成は銀を採掘した功績により外従五位下、千若も女官として正五位下に昇っている。ただし広成・千若を最後に上道氏からの叙爵者(貴族または華族の爵位に叙せられること。)は確認できず、正道の功績による興隆も一過的なものにすぎなかった。

#### 他文献の登場箇所

- 『日本書紀』 応神22年秋9月庚寅(10日)条  
雄略元年春3月是月条  
雄略7年是歳条  
清寧天皇即位前紀・雄略23年8月是月条
- 『続日本紀』 天平宝字元年(757)7月戊申(2日)是日条  
天平宝字元年7月辛亥(5日)条  
天平宝字元年7月乙卯(9日)条  
天平宝字元年7月戊午(12日)是日条

天平宝字元年閏8月癸丑（8日）条  
 天平宝字元年12月壬子（9日）条  
 天平宝字2年（758）8月庚子朔是日条  
 天平宝字3年（759）11月丁卯（5日）条  
 天平宝字6年（762）8月丁巳（11日）条  
 天平宝字7年（763）正月壬子（9日）条  
 天平宝字8年（764）正月己未（21日）条  
 天平神護元年（765）5月庚戌（20日）条  
 天平神護元年8月庚申朔是日条  
 神護景雲元年（767）9月庚午（23日）条  
 延暦2年（783）8月壬戌（17日）条  
 延暦10年（791）3月壬午（22日）条  
 延暦15年（796）6月壬戌（3日）条  
 延暦16年2月乙丑（9日）条  
 延暦24年（805）8月癸卯（7日）条  
 弘仁11年（820）3月乙巳（3日）条  
 8・神皇本紀（雄略／清寧）

『日本後紀』

『旧事本紀』

始祖

大吉備津日子命  
 中子仲彦（日本書紀） 後裔氏族

上道朝臣／上道臣

※ 『氏族データベース』 国学院大学 古事記学センターウェブサイト (kokugakuin.ac.jp)

### 3 吉備氏一族の系譜伝承の違い

#### 3.1 上道臣 大吉備津日子命の後裔氏族

『古事記』には大吉備津日子命の後裔氏族とあるだけで、関係する伝承などは載せられていません。『古事記』では、七代孝靈天皇は第六代孝安天皇の皇子で、兄の名前が大吉備諸進命です。『古事記』にのみ記録され『日本書紀』では消されています。吉備の初見名ですが岡山県では知られておりません。何故でしょうか。『日本書紀』では、吉備津彦命（大吉備津日子命）の後裔氏族としての記述がなく、応神天皇の時代に吉備国上道県に封ぜられた中子仲彦が上道臣の祖とされています。

※ 『造山古墳石棺に、なぜ阿蘇石を使用するのか。造山古墳埋葬者の推定』 丸谷憲二 令和6年11月

※ 『吉備の王墓・造山古墳 大吉備諸進命、千足古墳埋葬者 三井根子命説』 丸谷憲二 令和5年

#### 4 『日本書紀』上道臣「中子仲彦」と第14代仲哀天皇

備前国の神社祭神に第14代仲哀天皇が多いことに注目しました。『日本書紀卷第十』の応神天皇22年の中子仲彦は上道臣、香屋臣の祖です。

『日本書紀卷第八』は「足仲彦天皇 仲哀天皇」で、足仲彦天皇が先に書かれています。

地名(人名)研究者として、実在性の低い天皇の一人とされる第14代仲哀天皇の名前に注目しました。「仲彦と足仲彦」で名前が同一です。

日本武尊の子で神功皇后の夫です。大足彦天皇(景行天皇)の皇子である日本武尊の第二子です。

母は活目天皇(垂仁天皇)の皇女の両道入姫命。即位2年、氣長足姫尊(神功皇后)を皇后としました。熊襲を討つため親征し穴門豊浦宮に滞在。即位8年、筑紫の檀日宮に至るも熊襲との戦いに敗れ、即位9年には親征先の筑紫で崩御し10カ月後、神功皇后が誉田別命(応神天皇)の母親です。仲哀天皇架空説があり仲哀天皇は実在性の低い天皇の一人です。その最大の根拠が実在性の低い父(日本武尊)と妻(神功皇后)を持つ人物であることです

※ 『日本書紀 1・2・3』 小学館 1999年

#### 4.1 第14代仲哀天皇と備前国

上道臣の祖、香屋臣の祖の名前は「中子仲彦」です。『日本書紀』は「足仲彦天皇 仲哀天皇」です。この名前を同一人と読みました。成務天皇48年3月1日に31歳で立太子。皇太子13年を経て先帝崩御二年後の1月に即位。白鳥となって天に昇った父の日本武尊を偲んで諸国に白鳥を献じることを命じたが、即位2年1月11日、氣長足姫尊を立后(神功皇后)し。2月、角鹿の筥飯宮へ。『日本書紀』内の一書(異説)や『天書紀』では熊襲の矢に当たり、檀日宮(現香椎宮)で崩御したとされる。遺体は武内宿禰により穴門豊浦宮(下関市長府)で、殯されました。

#### 4.2 第14代仲哀天皇と角鹿筥飯宮・・・「最古の桃太郎像」



図-1 最古の桃太郎像 氣比神宮蔵

氣比神宮(福井県敦賀市曙町)が筥飯宮です。境内に敦賀地名の発祥となった角鹿神社があります。仲哀天皇2年1月11日に氣長足姫尊を立后(神功皇后(卑弥呼))し。2月に仲哀天皇と共に角鹿の筥飯宮へ。3月に仲哀天皇が紀伊国の徳勒津宮に向かいますが神功皇后(卑弥呼)は角鹿に留まります。何故でしょうか。

吉備津宮縁起の鬼神の初見が天正11年(1583)の『備中吉備津宮勸進帳』で、桃太郎が形として現れたのは、慶長19年(1614)の

氣比神宮の装飾彫刻です。吉備津神社が少し早いですが『備前吉備津彦神社旧記断簡』の

永享六年（1434）の「第二越前一宮」とは氣比神宮です。出宮徳尚氏は「国造本紀の吉備津彦関連記事の検討」で、「角鹿国造は、成務天皇の代に吉備武彦の子の思加部彦が国造に任じられたとする。」と紹介しています。成務天皇は大足彦天皇（景行天皇）の第四皇子です。

※ 『最古の桃太郎像について』 丸谷憲二 平成 22 年

※ 『氣比神宮末社 擬領神社と 黄蕨(吉備)国』 丸谷憲二 平成 22 年

#### 4.3 『古事記』の仲哀天皇と神功皇后

『古事記』の仲哀天皇記には、仲哀天皇の活躍はほとんど記されていません。早々に崩御した天皇の代わりに話の中心となるのは、皇后の息長帯日売命（神功皇后）です。皇后は神のお告げを聞き、神々の力を借りつつ朝鮮半島の新羅に遠征し、天皇に奉仕するという約束を新羅国王から取り付け筑紫に戻ってきます。その時に、品陀和氣命（応神天皇）が生まれました。

#### 4.4 『日本書記』の神功皇后と卑弥呼

『国史大辞典』は「『日本書記』は、皇后を『魏志倭人伝』にみえる巫女的な女王卑弥呼と同一人と考えており、そのため皇后を卑弥呼と同時代の三世紀の人とし、関係事件もそれに合わせたようである。」との岡本堅治説を採用収録しています。

※ 『国史大辞典』吉川弘文館 1999 年

※ 『神功皇后』人物叢書 27 岡本堅治

### 5 名前の交換

吉備津神社の江戸時代末の温羅伝承の一番重要なのが名前の交換です。

初見は天正 11 年（1583）の『備中吉備津宮勸進帳』です。降参した「吉備冠者」が自分の名前を、大和から吉備平定に来た一宮彦命に譲って、一宮彦命が一宮吉備津彦大明神に改名しました。これにより吉備津彦命と呼ばれるようになりました。吉備津彦命の名前の元は「吉備冠者」です。つまり吉備津神社と吉備津彦神社の祭神は「吉備冠者」だということです。これが仏教です。名前を交換する事例が記紀に記録されています。

福井県敦賀市が『古事記』に登場するのは応神天皇からであり、『日本書紀』では垂仁天皇の段からです。応神天皇の母親の神功皇后（卑弥呼）の先祖が敦賀の「都怒我阿羅斯等」であり、『記紀』に応神天皇の名前と敦賀の神が名前を交換した経緯が書かれています。「一に云はく、初め天皇、太子と為りて、越国に行して、角鹿の筒飯大神を拝祭みたてまつりたまふ。時に大神と太子と、名を相易へたまふ。故、大神を号けて、去来紗別神と曰す。太子をば誉田別尊と名くといふ。然らば大神の本の名を誉田別神、太子の元の名をば去来紗別尊と謂すべし。然れども見ゆる所無くして、未だ詳ならず。」即ち、応神天皇の元の名はイザサワケでしたが、氣比大神の名と交換してホムタワケになりました。温羅(うら)の初見は、文化年間（1804～1818 年）の吉備津神社の『備中大吉備津彦宮略記』に「百済の王温羅」と有り、賀陽朝臣為徳の創作・造語です。

※ 『吉備津神社と吉備津彦神社の温羅伝説の違いをご存じですか』 丸谷憲二 令和 3 年

## 6 香屋臣の祖としての中子仲彦

『日本書紀』では、中子仲彦は上道臣の祖、香屋臣の祖です。香屋臣の記録を調査しました。5～6世紀の大和時代の政治形態に「氏姓制度」、氏姓政治制度です。「臣」という姓は天皇の政治を直接補佐する最高の人達に与えられてものです。「臣」と云う姓は、天皇政治を補佐する重要な位置を占めていました。

岡山市北区役所は「吉備仲彦は香屋臣の祖」と、中子仲彦の中子を削除して吉備仲彦と紹介しています。吉備仲彦の初見史料の調査を依頼しましたがわからないとの返答でした。吉備仲彦は姓抜きの拡大解釈です。

足守の見どころ（寺社・史跡編）・「葦守八幡宮と石鳥居」・岡山市のHPです。

領内総鎮守として古くから信仰を集める葦守八幡宮。応神天皇行幸の旧跡として知られるこの宮は、天皇から一帯の領有をまかされた応神妃兄姫の甥の吉備仲彦が、天皇の徳を追慕して創建したと伝えられています。康安元年（1361）と刻まれた門前の石鳥居は、銘のあるものとしては日本最古であり、国の重要文化財に指定されています。

年号にならんで神主に古代足守郷に勢力をふるった賀陽氏の名が刻まれています。宮を創建した吉備仲彦は香屋臣の祖。その血統が賀陽氏に引き継がれているといえます。

※ 足守の見どころ（寺社・史跡編） | 岡山市 (city.okayama.jp)

## 7 牟佐の高蔵神社と上道氏・・・牟佐大塚古墳



巨石墳である牟佐大塚古墳の被葬者は上道氏だと推定されます。牟佐大塚古墳は黄金色に輝く石室のヒカリモで知られ、初夏から秋に見ることができます。6世紀末築造で家形石棺です。奈良県橿原市見瀬町（大和国高市郡見瀬村）に牟佐座神社があり、延喜式神名帳には大社とあるそうです。

高蔵神社（岡山市北区牟佐 2803）は備前国総社神名帳（西大寺観音院蔵）に国内祝給鎮

図-2 牟佐大塚古墳内部

守諸大明神、125社の古社です。

江戸時代の地名は備前国赤坂郡高月郷牟佐村です。身狭（牟佐）は、阿知使主（安仁神社の近くに阿知地名）が率いて帰化した東漢氏の本拠地です。身狭村主青は倭の五王の一人雄略天皇の寵臣で、雄略天皇8年（464?）と雄略天皇12年（468?）に呉の国（宋）に派遣されました。

高倉山は国見岳（国中の米作りの見極めを行う祭政の地）で、高蔵神社の鳥居扁額（岡山市重文指定）に北朝年号で「正慶元年(1332)壬申十廿八（10月28日）」「正二位高蔵大明神」「大願主国神主上道康成」と刻まれ壬申の年に造られた扁額です。「大願主国神主上道康成」とあります。扁額は岡山市石関町で井戸堀時に出土し奉納されました。



図-3 高蔵神社 扁額

天正中（1573～1592年）地震に依り倒壊し、扁額のみ岡山城下に持ち帰っていたものです。

新嘗祭の杵舞は中止されました。平賀元義の嘉永2年（1881）の「杵舞記」写が岡山県立図書館のデジタル岡山大百科で公開されています。杵舞は君が代発祥の地・大宮神社（鹿児島県薩摩川内市入来町）の入来神舞に、「稲作の豊穰を祈願する舞。杵を持った2人が田起しや杵つきなど稲作の様子を舞う。杵舞の途中で田の神が登場。この緑の仮面の人物が田の神。田の神舞は、皆が知らない間に、田の神が昼も夜も毎日、田んぼを見回っている様子を舞う。」と説明され、台湾の原住民族である高山族歌舞『杵舞』が知られています。同様の神事と推定されます。

- ※ 『牟佐町内会』（e-okayamacity.jp）
- ※ 『牟佐坐神社』（奈良県橿原市見瀬町）神社巡遊録（jun-yu-roku.com）
- ※ 『高蔵神社 | 岡山県神社検索』 | 岡山県神社庁（okayama-jinjacho.or.jp）
- ※ 『君が代発祥の地・大宮神社と入来神舞』（鹿児島） |（arakawa-yasuaki.com）
- ※ 『高山族歌舞《杵舞》』-舞蹈视频-搜狐视频（sohu.com）

## 8 吉備氏叛乱伝承・・・任那国司田狭と星川皇子の叛乱

5世紀後半の豪族で吉備上道田狭。『日本書紀』雄略7年、是歳、条に宮廷で田狭が妻の稚媛を自慢するのを聞いた雄略天皇は、田狭を任那国司に任じ稚媛を奪ったとある。それを知った田狭は任那を離れて新羅に入る。雄略は田狭の子の弟君らに命じて新羅を討とうとするが、弟君は百濟にとどまった。田狭は弟君に使を送りともに雄略天皇に対抗しよう

とするが果たせなかった。雄略天皇は中国の歴史書に「倭王武」、埼玉県の埼玉稻荷山古墳から出土した鉄剣銘に「ワカタケル大王」として登場し、実在が確実視される天皇です。

清寧天皇即位前紀では、雄略天皇の死後、稚媛がその子の星川皇子を大王にしようとして大蔵を占領するが、大伴室屋らによって殺され、星川皇子を応援しようとした上道氏が軍船40艘を送るがまにあわず、かえってその所有する山部を奪われました。吉備氏の反乱の背景として、吉備勢力が瀬戸内海の水運をおさえ、朝鮮半島との独自の関係を築いたこと、中国山地の鉄資源???を資本として、大王勢力と結びつき、古墳時代中期に大躍進を遂げたとの説があります。

※ 『星川皇子の乱 - 星川皇子の乱の概要』わかりやすく解説 Weblio 辞書

## 9 大多羅と任那の多羅

多羅とは4世紀頃日本に服属した任那国の国名です。現在の韓国慶尚南道陝川です。任那国の多羅からの渡来(帰国)者がつくった町が大多羅(岡山市東区大多羅町)です。多羅は6世紀には新羅に帰属しました。『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』

※ 『隠された卑弥呼の記録「牛窓伝説と好太王碑」』丸谷憲二 令和2年10月21日

### 9.1 『日本書紀』の任那と多羅

『日本書紀』(720)崇神天皇条から天武天皇条にかけて「任那」が登場します。崇神天皇65年と垂仁天皇2年の条は、任那と日本の初見です。欽明天皇からは、ほぼ毎年任那の記録があり、欽明2年(541)4月の条に「任那日本府」があります。欽明天皇23年(562)の条に、加羅国、安羅国、斯二岐国、多羅国、率麻国、古嵯国、子他国、散半下国、乞滄国、稔礼国の十国の総称を任那と言うとあります。この10国は562年の任那滅亡に近い最末期の地名です。任那日本府は新羅によって滅ばされました。

### 9.2 「任那日本府」の時代も、瀬戸内海は航路が未開発か

福井県敦賀市の、気比神宮の気比は吉備と読めるとの伝承は正しいと考えました。

海洋史・土木史の長野正孝氏(元武蔵工業大学教授)の『古代史の謎は海路で解ける』説は正しいと考えます。「卑弥呼の時代、瀬戸内海は航路が未開発であり通行できなかった。瀬戸内海は古代の船にとって航路をつくるのが難しかった。現代の歴史学者は、瀬戸内海は普通に通れると疑問を持たない。交易は主に日本海側で行われていました。」と。長野正孝氏は当時の航海技術や地形に基づき、海人の身になって丹後半島の遺跡に身を置けば、鉄と翡翠で繁栄する王国の姿が見えてくるとし、「邪馬台国・丹後半島説」です。長野正孝氏説を受けての丸谷説です。

『魏志倭人伝』の「南の邪馬台国 女王卑弥呼の国に着くには、海上の航行十日と陸路の歩行一箇月とがかかる」の出発地は丹後半島か、敦賀か。船を放棄しての陸路歩行です。

※ 『古代史の謎は海路で解ける』長野正孝(元武蔵工業大学教授)2015年 PHP 研究所

### 9.3 今来才伎とは

今来才伎とは渡来人のことです。五世紀頃から、大陸の唐、渤海、そして朝鮮半島の伽耶、百濟、新羅、高句麗から渡来し、文字や五経や仏教、土木工学、建築、画、仏像、織物、手工芸、馬と馬具、須恵器など思想や文化、技術を伝えた人たちです。彼らは厚遇され、天皇の側近として仕える者も数多おりました。特に有名な渡来人は、高句麗系（北朝鮮）の高麗氏。新羅系（韓国）の秦氏。百濟・伽耶系（韓国）の漢氏です。新羅の秦氏は、中国古代の秦の始皇帝とは無関係です。坂上田村麻呂らが後世になって自称したに過ぎません。

### 10 上道臣斐太都の橘奈良麻呂らの謀反密告

上道斐太都は、孝謙朝の天平宝字元年（757）中衛舎人を務めていた際、橘奈良麻呂らによる皇太子・大炊王（淳仁天皇）や紫微内相・藤原仲麻呂を殺害する謀反計画への参加を前備前守・小野東人から勧誘されるが、逆に藤原仲麻呂に対してこの計画を密告し、関係者は捕縛され謀反は未然に防がれました（橘奈良麻呂の乱）。この功績によって、従八位上から一挙に15階昇進して従四位下・中衛少将に叙任され、元の臣姓から朝臣姓を賜与され、さらに天平宝字元年（757）末に功田20町を賜与されます。

仲麻呂政権下において地方豪族としては異例の抜擢を受け、仲麻呂に接近することで昇進し、下道真備（吉備真備）が朝廷で重用されており対抗意識と説明されます。仲麻呂政権下では上道正道を名乗り、神護景雲元年（767年）9月23日卒去。最終官位は備前国造従四位下でした。

### 11 上道広成の銀採掘と南都西大寺「備前国大豆田庄一卷、上道広成所献」

吉備国の「銀」の初見は『日本紀略篇十三』延暦十五年（796年）六月条の「木工寮大充の上道臣広成は、備前国の銀を採掘、献上し外従五位下を賜る」です。外位とは内位に対して傍系です。真言律宗総本山 西大寺（奈良市）蔵の、宝亀十一年（780）『西大寺資材流記帳』に「願文一卷献 入薬院水田、在備前国」「備前国大豆田庄一卷、上道広成所献」とあります。延暦十五年（796）の備前国の銀山跡を探しました。瀬戸内市邑久町本庄銀山跡は備前国大豆田庄の近くです。南都西大寺の大豆田荘は瀬戸内市邑久町豆田周辺であり、上道広成が南都西大寺に寄進した土地です。南都西大寺の荘園が備前西大寺の地名の由来です。上道千若も女官として正五位下に昇っています。

#### 11.1 本庄銀山跡が上道広成の銀採掘跡か

『邑久町史 地区誌編』第七章 玉津地区に金山坑道、「尻海大土井の鳥谷に金山坑道の跡があります。ここでは水晶を取っていました。その他にも尻海敷井の通山にも金鉾があったと伝えられ、古老が「通山から金が出る。尻海村から金が出る。末は村長 おうじょうが谷」と歌っていたと聞き伝えられています。と記録されています。

※ 瀬戸内市邑久町本庄銀山跡 調査報告書 丸谷憲二 平成24年2月21日

### 10.2 備前車塚古墳と三角縁神獸鏡

備前車塚古墳（岡山市中区四御神・湯迫にある墳長 48mの前方後方墳です。墳形は前方部がバチ形に開く前方後方形です。石室の上面は天井石 8 枚で覆われ、内部の粘土床に割竹形木棺が据えら、石室内から三角縁神獸鏡 11 面を始めとする多数の副葬品が検出されています。古墳時代初期頃の築造で豊富な副葬品から当時の勢力の大きさが示唆され、三角縁神獸鏡の同範鏡論の基準資料として重要視される古墳です。11 面のうち 8 種 9 面（2 面は内部同範）は、<sup>つばき い</sup>椿井大塚山古墳（京都府木津川市）出土鏡をはじめ九州地方から北関東地方の多くの古墳の出土鏡と同範鏡の関係です。同範鏡とは同一の鑄型を用いてつくられた銅鏡です。中国からの<sup>はくさい</sup>舶載鏡だけでなく、国産の<sup>ほうせい</sup>仿製鏡にも例があり、とくに三角縁神獸鏡の例が知られません。被葬者は『岡山市史』は『古事記』の<sup>きび</sup>大吉備津日子命説（<sup>かみつみちのおみ</sup>吉備上道臣祖）説で、『日本書紀』は<sup>なかつこなかつひこ</sup>中子仲彦（<sup>かみつみちのおみ</sup>上道臣祖）説です。

『宇野地区の歴史—旧上道郡宇野村史—』に、「当時、この吉備地方にも邪馬台国に匹敵するような小国家を統治する王がいたようである。」とありますが、吉備国に邪馬台国がありました。

（岡崎春樹・岡将男・丸谷憲二説）

※ 『地名学では邪馬台国は岡山です』丸谷憲二 平成 29 年 7 月 27 日



図-5 三角縁神獸鏡

### 11.3 卑弥呼と備前車塚古墳

『魏志倭人伝』に、魏の皇帝から卑弥呼に対して「銅鏡百枚」等を下賜する詔書が発せられ、正始元年(240)帯方郡より卑弥呼に届けられと記録されています。兵庫県立考古博物館に卑弥呼の鏡が展示されています。三国時代の中国の年号、<sup>せいし</sup>正始元年(240)の銘がある森尾古墳出土鏡の復元鏡です。正始は中国の<sup>ちゆうげん</sup>中原を中心に樹立された魏の年号で、正始元年は西暦 240 年です。森尾古墳の鏡は、その年号が記されており、魏から卑弥呼がもらった銅鏡と推定します。

平城京と平安京に挟まれ、恭仁宮、長岡京が置かれた山城地域にある椿井大塚山古墳（京都府木津川市山城町）は、古墳時代前期（3 世紀後半）の中でも最古に位置づけられる代表的な前方後円墳で、平成 12 年（2000）「国史跡」に指定されました。全長 180m をこす前方後円墳で、古墳時代前期の古墳としては全国でも有数の規模を持ちます。昭和 28 年(1953)、古墳の後円部を南北に切断する現在の J R 奈良線の法面改良工事が実施され、偶然に竪穴式石室が発見されました。石室内からは、36 面以上の中国鏡が出土し、そのうち 32 面が「三角縁神獸鏡」でした。鏡の大量出土だけでなく、その鏡が邪馬台国の女王・卑弥呼の鏡と考えられ一躍、注目を集めました。そして、椿井大塚山古墳は、古墳の出現と古墳時代の成立を考える上で、極めて重要な遺跡となりました。

4 世紀頃の備前車塚古墳から 13 面の中国鏡が出土し、卑弥呼に贈られた銅鏡百面のうちの「三角縁神獸鏡」が 11 面出土しています。

卑弥呼の時代より前の弥生時代の北部九州の奴国が漢に<sup>かん</sup>朝貢して、漢委奴国王の金印と漢鏡をもらっています。北部九州に渡来した稲作弥生人は呉の国からであり、漢民族にも

存在する Y- DNA O2b を持っている呉の太伯の末裔でした。吉備国には大伯漢音の（タイハク）地名が残されています。

※ 『その後の卑弥呼・邪馬台国は岡山です』 丸谷憲二 令和4年7月11日

#### 11.4 卑弥呼と浦間茶臼山古墳

浦間茶臼山古墳（岡山市東区浦間）は墳長 138m で最古形式の前方後円墳で国指定史跡です。吉備国最古の大形前方後円墳であり、邪馬台国の女王卑弥呼、台与の墓説のある奈良県桜井市箸墓古墳の 2 分の 1 相似形墳の一つです。箸墓古墳の相似形墳のうち畿内以外では最も大きく古墳時代に巨大な勢力を誇った吉備の始まりの古墳です。特殊器台形埴輪、都月型埴輪と呼ばれる最古型式の埴輪群をもつ国内最古の前方後円墳の一基です。浦間茶臼山古墳は前方部が三味線のバチのように広がる形をしています。これは箸墓古墳に代表される最古型式の前方後円墳に特有の特徴です。



図-6 浦間茶臼山古墳

北條芳隆氏（東海大学教授）の「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価」によると、箸墓古墳の 1/2 の相似形をしており、大和勢力によって規制された結果です。箸墓古墳の被葬者とともに、古墳時代の始まり＝倭政権の成立・卑弥呼に係わった吉備の王墓です。浦間には産鉄地名が多く金黒谷・貫抜間・鎌崎・金坊谷・東金坊・金坊沖があります。古代からの製鉄地名が「金黒谷」です。備前長船刀の大宮派・大宮剣工は鎌倉時代中ころから室町時代にかけての鍛刀です。

#### 11.5 百間川遺跡群と雄町遺跡

百間川遺跡群は、百間川の河川敷とその周辺に広がるムラの跡です。百間川原尾島遺跡の弥生時代後期のムラと田んぼ。写真中央の水路とその右側に広がる田んぼは、弥生時代後期の終わり頃の洪水の砂で埋まっていた。発掘調査で縄文時代後期から室町時代までの人々の生活の様子が明らかになりました。特に、弥生時代の終わりがごろに起きた洪水で埋まった田んぼの発見です。



図-7 百間川遺跡群

※ 『百間川遺跡群』 ムラ - 岡山県ホームページ (pref.okayama.jp)

#### 11.6 岡山市雄町遺跡出土 銅鐸

雄町遺跡も複合遺跡であり銅鐸が出土しています。銅鐸は昭和 60 年(1985)4 月 4 日、岡山市「雄町の冷泉」近くの水田の 45cm 地表下から発見されました。平成 22 年 5 月 2 日に

銅鐸発見者である岸本郁栄氏のご子息、岸本哲雄氏を訪問しました。発見の経緯は、土地所有者の岸本郁栄氏が自宅の庭先に当たる水田の一角に、鯉のぼりの柱を立てるための小穴を掘ったところ、地下 40～50cm の所で銅鐸に当たりました。6 月上旬に鯉のぼりの柱を抜き取り、出土位置を確認しました。

### 袈裟襷文銅鐸

銅鐸は中位に鯉ひれを水平方向に向けた状態で発見されました。

鑄造時の湯回りは不良であり補鑄の痕跡があります。鐸身上部の袈裟襷文は表出されていません。鑄造後に細い線刻で補刻されています。つまり、銅鐸鑄造技術が確立していない最初期(縄文晩期)の銅鐸です。

※ 『操山と吉備(黄蕨)前国 銅鐸出土地の考察』 丸谷憲二 平成 22 年 6 月 06 日

## 11.7 金蔵山古墳と網浜茶臼山古墳、湊茶臼山古墳と操山古墳群



金蔵山古墳 165m (岡山市中区沢田) は、前方後円墳。岡山県では第 4 位の規模の古墳で、4 世紀後半～5 世紀初頭(古墳時代前期～中期)頃の築造と推定されます。造山古墳が築造されるまでは中国・四国・九州地方で最大規模であり、墳丘規模・豊富な副葬品の点で吉備地方の代表的古墳で、埋葬者を<sup>おうじん</sup>応神天皇の皇子の<sup>わかのけふたまたおう</sup>若野毛二俣王の女、<sup>たいのなかひめ</sup>田井之中比売と推定(丸谷説)しました。

### 図-8 金蔵山古墳後円部石室東壁

網浜茶臼山古墳(岡山市中区赤坂南新町)の特殊器台形埴輪より古墳時代初期頃築造です。周辺では操山 109 号墳のほか操山 103 号墳・操山 106 号墳・湊茶臼山古墳といった前方後円墳が築造され、網浜茶臼山古墳(92m)は操山 109 号墳とともに旭川下流域において最古級の盟主墳です。

湊茶臼山古墳(岡山市中区湊)は、旭川東岸の操山丘陵南部の山頂に築造された大型前方後円墳です。操山では古墳 200 基以上の分布が知られています。出土品としては、円筒埴輪・朝顔形埴輪や、形象埴輪(家形・盾形・草摺形埴輪)、土師器、陶質土器(推定)、鉄鏃などです。出土埴輪から古墳時代前期末～中期初頭の 4 世紀末～5 世紀初頭頃の築造と推定されます。海から見える古墳であり、海上交通が推測され、未完成の古墳です。古墳祭祀を考察するうえで重要視されます。操山古墳群は前期と後期で断絶がありますが、<sup>かみつみちうし</sup>上道氏と幡多氏と考えます。

## 11.8 幡多麿寺と賞田麿寺と古都麿寺

上道氏の氏寺として、3寺院が創建され、出土瓦等から3寺院が一体的に経営され上道氏の強大な権力と中央政権との強い繋がりが推定されます。幡多麿寺塔跡（岡山市中区赤田）は仏教寺院跡に残る塔跡の遺跡で、塔跡が国指定です。塔心礎の大きさは県下最大です。心礎表面には被熱痕があります。上道氏の氏寺の一つと推測されますが、地名から幡多氏の氏寺です。備前国府跡があり、地域一帯は古墳時代から奈良時代にかけての古代吉備の中心地でした。



図-9 幡多麿寺塔跡

- ※ 『幡多麿寺』 (city.okayama.jp)
- ※ 『幡多麿寺発掘調査報告書』岡山市教育委員会文化財課 岡山市教育委員会 1975
- ※ 『ふるさと再発見幡多麿寺跡』岡山市立東公民館 1992 p4~p7
- ※ 『幡多麿寺-旧備前国上道郡所在の古代寺院の発掘調査報告-』岡山市教育委員会 2015

### 11.8.1 幡多氏の考察

総社市は秦で岡山市は幡多です。多に注目しました。『古事記』は波多です。波多地名は、肥前国松浦郡波多村（佐賀県唐津市）、大和国高市郡波多郷（奈良県高市郡明日香村畑）、出雲国飯石郡波多郷（島根県雲南市掛合町）、肥後国天草郡波多郷（熊本県天草市）で、幡多郷地名は、三河国渥美郡幡多郷、近江国長下郡幡多郷、紀伊国安諦郡幡陀郷です。『古事記』に「波多の八代の宿禰」と「波多」と書かれています。中国の景教（ネストリウス派キリスト教の中国での呼称）ではギリシャ語の司教（パトリアーク）の漢訳が「波多力」です。

ギリシャ語“πατριάρχης”（パトリアルケース）は、ラテン語では“patriarcha”（パトリアルカ）。旧約聖書の七十人訳では族長時代の族長。

『旧唐書』巻198によると、貞観17年（643）「拂菻王波多力」（波多力は「Papas Theodoros」の音写か。ただ、当時の皇帝はコンスタンス2世であり、該当する人物が定かではない。）

『古事記』の記録は正確です。『日本書紀』では、応神天皇14年に百濟より百二十県の人を率いて帰化したと記され、弓月君を秦氏の祖とするとあり、弓月君は朝鮮半島を経由しての渡来です。秦氏の故郷、弓月国（クンユエ）は中央アジアのカザフスタン内にあります。天山山脈のすぐ北側に位置し南にキルギスタンがあります。弓月国はシルクロードの北方ルート上にあります。バルハシ湖の南、イリ川付近です。弓月国の人々も万里の長城の苦役に耐え切れず日本へ渡来しました。1084年（元豊7年）成立の『資治通鑑』全294巻、巻第199に弓月の記録があり、弓月国を発見したのは言語学の佐伯好郎氏です。

吉備国の最古の表記・黄蘗の語源調査結果は東突厥国を意味しています。東突厥国から吉備国への渡来です。これは日本人バイカル湖畔起源説であり、古代から吉備国への渡来ルートがあり、アルタイ語民族のほとんど全てに見られる文化的要素が扶余、高句麗を通じ、さらに百済、新羅など朝鮮半島を経由して、古代日本の形成期に吉備国に伝わりました。私たちが学校で習った藤原氏の日本史『日本書紀』では記録が消されました。



図-10 弓月国とシルクロード

- ※ 『秦王国の所在地と秦氏の祖・弓月君の故郷 弓月国の考察』 丸谷憲二 平成 27 年 6 月 25 日
- ※ 『日本とユダヤのハーモニー&古代史の研究』 (historyjp.com)
- ※ 『八幡大神、神功皇后を祭る宇佐神宮の謎に迫る』 au Web ポータル国内ニュース (auone.jp)

### 11.9 式内社 大神（おおが）神社

大神神社（岡山市中区四御神）は、平安時代 927 年の『延喜式神名帳』に備前国二十六座の内、上道郡四座とは「大神神社の祭神が四座」との意味で由緒ある神社です。大神神社ではなく大神神社で、奈良県桜井市三輪の大神神社からの遷座説は間違いです。末社に松尾・御崎社があり、松尾は秦氏です。神額に土師社と刻まれ、元の鎮座地は字土師森でした。



図 11 大神神社

### 11.10 神宮寺山古墳と鍛冶

神宮寺山古墳（岡山市北区中井町）は古墳長約 150m の前方後円墳、昭和 34 年に国史跡指定です。後円部に式内社天計神社が鎮座しています。竪穴式石室で副葬品埋葬用の小竪穴式石室から刀や剣などの武器や農具などの鉄器が出土し鍛冶遺跡です。出土埴輪から古墳時代前期後半-中期初頭の 4 世紀後半-5 世紀初頭頃の築造と推定されています。吉備の古墳の多くは丘陵地に築造されるが、大型前方後円墳としては沖積地に築造されています。半田山の近くであり幡多氏の古墳と推定します。旭川流域では、古墳時代前期の大型古墳として神宮寺山古墳・金蔵山古墳・湊茶臼山古墳が築造されました。



図-12 神宮寺山古墳

### 11.11 一本松古墳と鍛冶

標高 85m 程の半田山植物園丘陵頂部に位置する全長 65m の前方後円墳です。後円部径 43m で、埴輪や葺石はありません。後円部の頂上は戦時中に高射砲陣地となった時、大きな穴がつけられたが竪穴式石室がありました。東京国立博物館に保管されている副葬品には、鉄槍や一部に金を張った冑などの武器類に加え、鉄を鍛えるのに用いた金槌やヤットコがあり、古墳に埋葬された首長と鍛冶集団の関わりが注目されます。この古墳は、古墳時代中期、5 世紀半頃の築造で、古墳の南の尾根筋など、周辺部には、小規模な方形の古墳数基や、弥生時代の墓地などが所在しています。半田山であり幡多氏の古墳と推定します。

### 11.12 鍛冶遺跡の赤土

岡山県では赤土（赤泥）製鉄遺跡の発見報告はありません。しかし、鍛冶遺跡には赤土や黒土が報告されています。発掘担当者が赤土が製鉄原料と知らないのです。赤土には赤鉄鉱と褐鉄鉱があり、赤鉄鉱や褐鉄鉱から縄文時代からベンガラが製造されていました。

鍛冶遺跡で発見された赤土が磁石に反応すれば、赤泥（ソブ）製鉄の原料残の可能性が  
あります。弥生時代の吉備国の製鉄原料は赤泥（ソブ）であり、現代の製鉄原料である赤鉄  
土と推定しました。だから岡山の鉄の品質は他所より優れていたはずです。

※ 『弥生時代の赤泥（ソブ）製鉄の可能性・中間報告-2 実験考古学による実験報告と岡山大学教育学部卒業実験まで』 丸谷憲二 令和 5 年 12 月

### 11.13 石棺を持つ巨石墳・唐人塚古墳

唐人塚古墳（岡山市中区賞田）は、横穴式石室に竜山石の刳抜型石棺の身のみが遺存しています。牟佐大塚古墳に次ぐ刳抜式家形石棺です。巨石を用いた数少ない古墳で、近くに賞田廃寺址があり上道氏の古墳と推定され、この伝承が正しければ上道氏は渡来人となります。

箭田大塚古墳（倉敷市真備町箭田）と牟佐大塚古墳ともり塚古墳が吉備の三大巨石墳です。

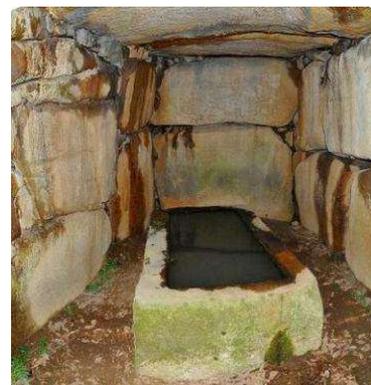


図-13 唐人塚古墳

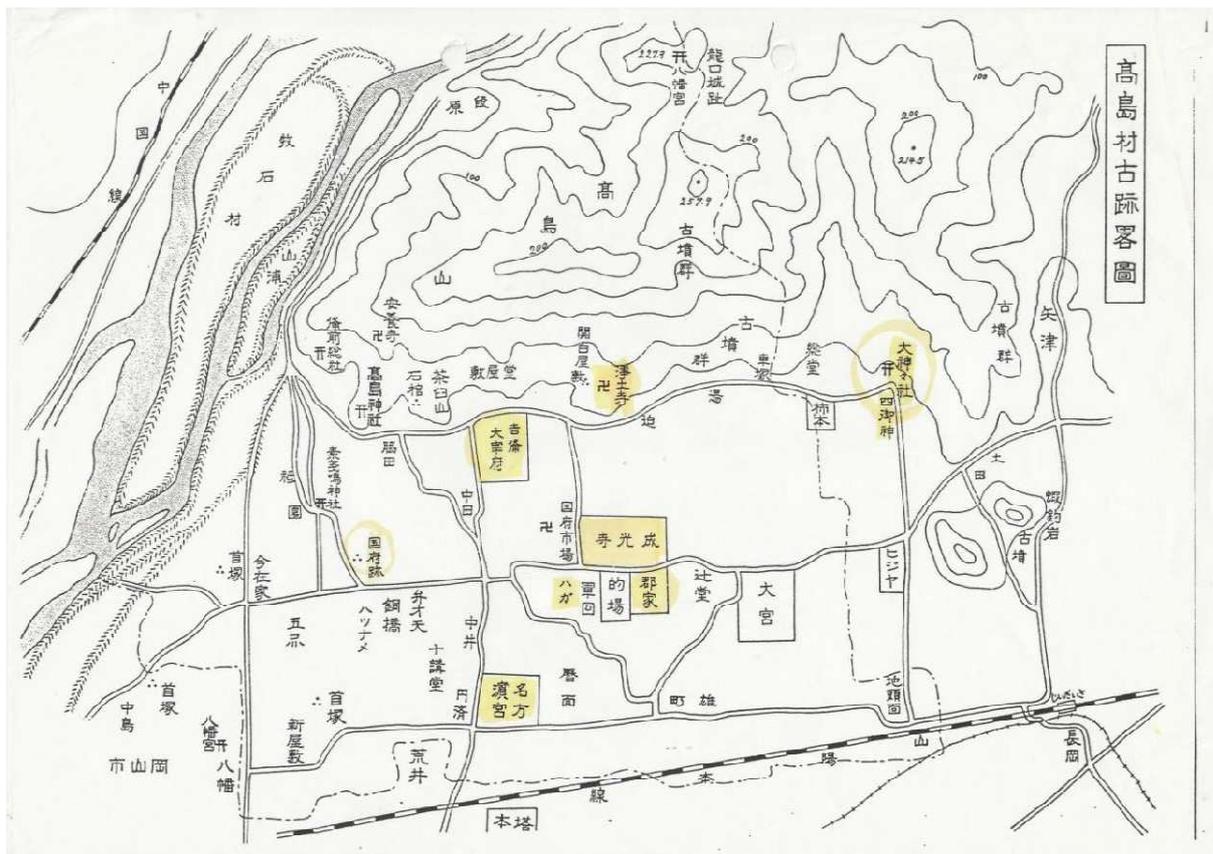
## 12 備前国府 吉備上道国造、上道臣の本拠

応神天皇 22 年 3 月、難波大隅宮へ行幸し、妃の兄媛を実家の吉備に返し、9 月に難波から淡路島、吉備へ行幸し、兄媛の兄弟と甥に吉備の統治権を与えました。兄媛を吉備臣祖の御友別の妹と記し、御友別の中子である仲彦命を上道国（備前国上道郡）に封ずとあり、上道臣祖・香屋臣祖です。仲彦命の末裔が上道臣として代々この地方を治めました。

国郡里制とは大宝元年（701）制定の大宝律令で、国・郡・里の三段階の行政組織を編成し中央集権体制が確立しました、そして上道国を二分し上道郡と赤坂郡と名づけました。「国司は中央から派遣された貴族」、「郡司は地方の有力な豪族」が任じられました。

国長は高島村に置かれました。備前国府は岡山市中区国府市場にあり、国長宮周辺から高島公民館、高島小学校辺りにかけては古代・中世の建物跡や溝、土器などが随所に出土し、国庁宮周辺には「北国長」・「国長」・「南国長」などの国庁地名が残り、国庁があったと古くから想定されてきました。

図-14 備前国府想定域図 『高島村史』吉備高島聖跡顕彰会 昭和12年



### 13 神武天皇の兄 稲飯命 (いないい) ⇒新羅の王⇒半島交易

『神武天皇と兄たち』『神武東征と吉備国』の安仁神社の紹介 大矢野英次氏 (久留米大学名誉教授) 平林金属本社 2022年12月18日

**『神武天皇四兄弟の役割』**

彦五瀬命 (ひこいつせ) ;将軍⇒戦死 (五ヶ瀬町)

**稲飯命 (いないい) ⇒新羅の王⇒半島交易**

三毛入野命 (みけいりの) ⇒逃亡⇒吉備国兄神社?⇒三毛 (蝦夷) との関係で追記された兄

神日本磐余彦尊 (かむやまといわれひこ) ⇔瀬戸内海交易の兵站(へいたん)担当者

※ 『安仁神社の太陽信仰』せとうちキラリ☆市民文化講座 丸谷憲二 令和5年4月16日

#### 13.1 稲飯命 (いないい) ⇒新羅の王⇒半島交易

稲飯命（いないい）は、そのまま韓国の新羅に渡り神羅の国王になったという、新羅王の祖先との結婚説です。『但馬国司文書 但馬故事記』では「稲飯命（いないい）」と「豊御食沼命（三毛入野命、みけいりの）」は、和歌山の海に入るところで台風に遭い、そのまま新羅に漂流したとされています。『日本書紀』では、垂仁天皇3年3月条に新羅王子の天日槍（アメノヒボコ）が渡来したと記録され、稲飯命（いないい）の5世で兵庫県出石（いずし）への渡来です。牛窓伝説の謎が解けました。古代新羅を敵国視していません。新羅との交流記録です。



図-15 縄文人の渡来元

## 14 縄文人と弥生人の渡来元

### 14.1 縄文人の渡来元

縄文人は南方アジア人で樺太や半島や太平洋から渡って来ました。南アジアとはアジア南部の地域で、アフガニスタン、バングラデシュ、ブータン、インド、モルディブ、ネパール、パキスタン、スリランカの各国を含む地域です。

私の「出雲の神様はインドからの渡来人説」も少しずつ注目されてきています。

※『日本への稲作の伝来』倉本一宏 2021年1月29日 山陽新聞

※『龍蛇様(背黒海蛇)から見える出雲の神迎祭と神在月』丸谷憲二 平成26年12月

### 14.2 弥生人の渡来元

朝鮮半島からやってきた北方アジア人が弥生人です。（倉本一宏氏・国際日本文化研究センター教授）。北アジアはユーラシア大陸のアルタイ山脈以北を指し、シベリアを主とする地域です。モンゴルおよびロシアの領土が含まれます。

私の吉備国の最古の表記「黄蕨国を、突厥国からの渡来人説」も少しずつ知られてきています。岡山県へは福井県敦賀市より徒歩と筏での渡来です。

※『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起と吉備国語源考 黄蕨・羈縻政策説と日本人バイカル湖畔起源説』平成31年2月14日

※『氣比神宮と黄蕨(吉備)国 保食神(騎馬民族)の軌跡』丸谷憲二 平成25年8月20日

## 15 まとめ

岡山県立図書館蔵書の上道氏調査は、出宮徳尚氏（岡山市教育委員会）の1976年『古代吉備の豪族 上道氏 -その形成への地域史からの展望-』で止まっているようです。今回のテーマを「吉備国の古代史・上道氏と幡多（波多）氏の謎」としました。謎の意味は「吉備国の全ての部族の先祖渡来人」説です。吉備津彦命は東突厥国、上道氏はインド（巨石文化）、波多氏は弓月国です。黄蕨津彦命の東突厥国は波多氏の弓月国の近くです。弓月国は東突厥国に含まれるかもです。

今回の最大の成果は『日本書紀』を小説（創作）と読み、<sup>かみつみちのおみ</sup>上道臣と<sup>かやのおみ</sup>香屋臣の祖である<sup>なかつなかつひこ</sup>中子仲彦と第14代仲哀天皇の名前が「仲彦と足仲彦」を同一人と読みました。一人の業

績を二人に分割したと。氣比神宮の桃太郎像と岡山の桃太郎伝説が完全に結びつきました。『日本書紀』の研究で、このような読み方は私が初めてのようです。吉備国と角鹿筥飯宮が結ばれました。地名学の成果です。神武天皇の兄 稲飯命（いないい）⇒新羅の王⇒半島交易を紹介しました。倭国と新羅との関係が明確になりました。

幡多氏の考察として『古事記』に注目し、「波多の八代の宿禰」から中国の景教ではギリシャ語の司教（パトリアーク）の漢訳「波多力」は「Papas Theodoros」の音写かとしています。

※ 『古代吉備の豪族 上道氏 -その形成への地域史からの展望-』出宮徳尚「歴史手帳 第4巻 第6号 特集・古代の吉備国」名著出版 1976 p17～p25

#### 14.1 仲彦と末子に注目

岡将男氏から「この際、上道の通史を語るのには意味がありますね。資料価値としては、こういう資料があるという文章と、私はこう思うという部分は、段落分けしておいたほうがいいかもしれませんね。長野氏の著作で、瀬戸内海航路を否定的に捉えているけれど、大体 350 年位以後、神功皇后が実在するかどうかはともかく、古墳時代前期末、古墳で言えば牛窓天神山古墳や紀伊の古墳群形成以後は、瀬戸内海航路の重みがグッと増える。

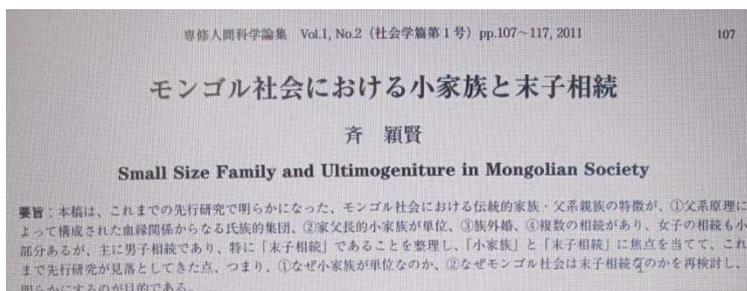
また仲彦は「まん中の子」くらいの普通名詞の場合も多く、軽々に一緒にするのは危険ですよ。まずは簡単に一読の感想。」を頂きました。（令和 5 年 2 月 21 日）

末子相続は調査しましたが、「中子仲彦」は渡来元の違いかもしれません。

#### 14.2 欠史八代と末子相続

平成 27 年 11 月 8 日に岡山北西ロータリークラブ主催の『第 2 回高校生による岡山の歴史・文化研究フォーラム』が山陽新聞さん太ホールで開催され、岡山学芸館清秀高等部 2 年生で「地域史探求ゼミ」の古中奈海・橘瑞貴さんが『神武天皇と西大寺のつながり』を発表しました。安仁神社祭神の研究発表です。指導は萩原良充先生です。二人の発表は「弥生時代の戦いの思考」として「神武天皇は 4 人兄弟の末子であり、末子相続は遊牧民族の文化であることがわかった。天皇家のルーツはモンゴルに起源を持つのではないかと考えた。」との注目すべき発表でした。参考文献が齊穎賢氏の『モンゴル社会における小家族と末子相続』でした。

欠史八代とは、『古事記』・『日本書紀』において系譜（帝紀）は存在するがその事績（旧辞）が記されない第 2 代綏靖（すいぜい）天皇から第 9 代開化天皇までの 8 人の天皇です。現代の歴史学ではこれらの天皇達は実在せず後世の創作と考えられています。古代の天皇達の実在を疑問視する説を初めて提唱したのは、津田左右吉氏（早稲田大学教授）です。津田左右吉説は第二次大戦後に古代史学の主流になりました。太田亮氏（立命館大学教授）や白鳥清氏（東洋史）は、神武天皇から応神天皇までは長子相続でなく末子



相続であり、末子相続は兄弟相続よりも古い習俗であり、むしろ実在の根拠と説明されま  
す。歴史学には後世に記録が削除されたという発想がありません。

## 15 謝辞

牟佐の高蔵神社扁額情報を、田尻祐二氏（牟佐町内会長）からいただきました。高蔵神  
社総代の平井誠氏（牟佐町内会）から扁額の拓本どりを打診された岡山市教育委員会は、そ  
の必要性を判断し、高橋伸二氏（岡山市教委）が令和 2 年 8 月 24 日から拓本どりに着手。  
同年 9 月 5 日には完成させたものの一つを高蔵神社に提供していただきました。これま  
でに文献紹介されている内容と異なります。

## 16 参考文献

- 『古事記』新潮日本古典集成 新潮社 昭和 54 年  
『吉備津彦伝承考(弐) その系譜の史料的検証』出宮徳尚 『吉備地方文化研究第 19 号』2009 年 就  
実大学吉備地方文化研究所  
『上道氏本貫地の遺跡郡 その 1 No. 319』出宮徳尚 古代吉備国を語る会  
『上道氏本貫地の遺跡郡 その II No. 322』出宮徳尚 古代吉備国を語る会  
『上道氏と下道氏の相克-石棺の分布が示す地方の分断施策-』草原孝典「岡山市埋蔵文化財センター研  
究紀要第 4 号」岡山市教育委員会文化財課 岡山市教育委員会 2012 年 p43～p55  
『道制と氏の称』「岡山県史 第三卷 古代 II」岡山県 平成 2 年 岡山県 p172～p179  
『可知郷土史』昭和 48 年 西大寺公民館可知分館 p155～p158  
『改修 赤磐郡誌全』昭和 15 年初版 岡山県赤磐郡教育会 p430～p431  
『宇野学区の歴史』宇野学区史刊行会 昭和 56 年・1981  
『古都の史跡めぐり』岡山市立西大寺公民館 古都分館 昭和 57 年  
『厳選 吉備の古墳 18 選』岡山市教育委員会